旅僧

泉鏡花

青空文庫

上

去にし年秋のはじめ、汽船加能丸の百餘の乗客を搭載して、加州金石に向ひて、越前敦賀港を發するや、一天麗朗に微風船首を撫でて、海路の平穩を極めたるにも關はらず、乘客の面上に一片暗愁の雲は懸れり。

蓋し薄弱なる人間は、如何なる場合にも多くは己を恃む能はざるものなるが、其の最も不安心と感ずるは海上ならむ。

然れば平日然までに臆病ならざる輩も、船出の際は兎や角と縁起を祝ひ、御幣を擔ぐも多かり。「一人女」「一人坊主」は、暴風か、火災か、難破か、いづれにもせよ危險ありて、船を襲ふの兆なりと言傳へて、船頭は太く之を忌めり。其日の加能丸は偶然一人の旅僧を乘せたり。乘客の暗愁とは他なし、此の不祥を氣遣ふにぞありける。

旅僧は年紀四十二三、全身黒く痩せて、鼻隆く、眉濃く、耳許より頤、頤より鼻の下まで、短き髭は斑に生ひたり。懸けたる袈裟の色は褪せて、法衣の袖も破れたるが、服裝を見れば法華宗なり。甲板の片隅に寂寞として、死灰の如く趺坐せり。

加越地方は殊に門徒眞宗、歸依者多ければ、船中の客も又門徒七八分を占めたるにぞ、然らぬだに忌はしき此の「一人坊主」の、別けて氷炭相容れざる宗敵なりと思ふより、乞食の如

き法華僧は、恰も加能丸の滅亡を宣告せむとて、悪魔の遣はしたる使者としも見えたりけむ、乗客等は二人三人、彼方此方に額を鳩めて呶々しつゝ、時々〳〵法華僧を流眄に懸けたり。

旅僧は冷々然として、聞えよがしに風説して悪様に罵る聲を耳にも入れざりき。

せめては四邊に心を置きて、肩身を狹くすくみ居たらば、聊か恕する方もあらむ、遠慮もなく席を占めて、落着き澄したるが憎しとて、乗客の一人は衝と其の前に進みて、

「御出家、今日の御天氣は如何でせうな。」

旅僧は半眼に閉ぎたる眼を開きて、

「さればさ、先刻から降らぬから、お天氣でござらう。」と言ひつゝ空を打仰ぎて、

「はゝあ、是はまた結構なお天氣で、日本晴と謂ふのでござる。」

此の暢氣なる答を聞きて、渠は呆れながら、

「そりや、誰だつて知つてまさ、私は唯急に天氣模様が變つて、風でも吹きやしまいかと、其をお聞き申すんでさあ。」

「那様事は知らぬな。私は目下の空模様さへお前さんに聞かれたので、やつと氣が着いたくらゐぢやもの。いや又雨が降らうが、風が吹かうが、そりや何もお天氣次第ぢや、此方の構ふこツちや無いてな。」

「飛んだ事を。風が吹いて耐るもんか。船だ、もし、私等御同様に船に乗つて居るんですぜ。」

と渠は良怒を帶びて聲高になりぬ。旅僧は少しも騒がず、

「成程、船に居て暴風雨に逢へば、船が覆るとでも謂ふ事かの。」

「知れたこツたわ。馬鹿々〳〵しい。」

渠の次第に急込むほど、旅僧は益す落着きぬ。

「して又、船が覆れば生命を落さうかと云ふ、其の心配かな。いや詰らぬ心配ぢや。お前さんは何か（人相見）に、水難の相があるとでも言はれたことがありますかい。まづ〳〵聞きなさい。さも無ければ那様ことを恐がると云ふ理窟がないて。一體お前さんに限らず、乗合の方々〳〵も又然うぢや、初手から然ほど生命が危険だと思ツたら、船なんぞに乗らぬが可いて。また生命を介ずに乗ツた衆なら、風が吹かうが、船が覆らうが、那様事に頓着は無い筈ぢやが、恁う見渡した處では、誰方も怯氣々々ものに居らるゝ様子ぢやが、さて〳〵笑止千萬な、水に溺れやせぬかと、心配する様な者は、何の道はや平生から、後生の善い人ではあるまい。

先づ人に天氣を問はうより、自分の胸に聞いて見るぢやて。

（己は難船に會ふやうなものか、何うぢや。）と、其處で胸が、（お前は随分罪を造つて居るから何うだか知れぬ。）と恁う答へられた日にや、覺悟もせずばなるまい。もし（否、悪い事をした覺もないから、那様氣遣は些とも無い。）と恁ありや、何の雨風ござらばござれぢや。

喃、那様ものではあるまいか。

して見るとお前さん方のおど〳〵するのは、心に覺束ない處があるからで、罪を造つた者と見える。懺悔さつしやい、發心して坊主にでもならつしやい。（一人坊主）だと言うて騒いで

ござるから丁度可い、誰か私の弟子になりなさらんか、而して二三人坊主が出來りや、もう（一人坊主）ではなくなるから、頓と氣が濟んで可くござらう。」

斯く言ひつゝ法華僧は哄然と大笑して、其まゝ其處に肱枕して、乘客等がいかに怒りしか、いかに罵りしかを、渠は眠りて知らざりしなり。

下

恁て、數時間を經たりし後、身邊の人聲の騒がしきに、旅僧は夢破られて、唯見れば變り易き秋の空の、何時しか一面掻曇りて、暗澹たる雲の形の、凄じき飛天夜叉の如きが縱横無盡に馳せ※るは、暴風雨の軍を催すならむ、其一團は早く既に沿岸の山の頂に屯せり。

風一陣吹き出でて、船の動搖良激しくなりぬ。恁の如き風雲は、加能丸既往の航海史上珍しからぬ現象なれども、（一人坊主）の前兆に因りて臆測せる乘客は、恁る現象を以て推すべき、風雨の程度よりも、寧ろ幾十倍の恐を抱きて、渠さへあらずば無事なるべきにと、各〳〵我命を惜む餘に、其死を欲するに至るまで、怨恨骨髓に徹して、此の法華僧を憎み合へり。

不幸の僧はつく〳〵〃＼此狀を※し、慨然として、

「あゝ、末世だ、情ない。皆が皆で、恁う又信仰の弱いといふは何うしたものぢやな。此處で死ぬものか、死なないものか、自分で判斷をして、活きると思へば平氣で可し、死ぬと思や靜

に未來を考へて、念佛の一つも唱へたら何うぢや、何方にした處が、わい〳〵騒ぐことはない。はて、見苦しいわい。

然し私も出家の身で、人に心配を懸けては濟むまい。可し、可し。」

と渠は獨り頷きつゝ、從容として立上り、甲板の欄干に凭りて、犇き合へる乘客等を顧みて、

「いや、誰方もお騒ぎなさるな。もう斯うなつちや神佛の信心では皆の衆に埒があきさうもないに依つて、唯私が居なければ大丈夫だと、一生懸命に信仰なさい、然うすれば屹度助かる。宜しいか〳〵。南無、」

と一聲、高らかに題目を唱へも敢へず、法華僧は身を躍らして海に投ぜり。

「身投だ、助けろ。」

船長の命の下に、水夫は一躍して難に赴き、辛うじて法華僧を救ひ得たり。

然りし後、此の（一人坊主）は、前とは正反對の位置に立ちて、乘合をして却りて我あるがために船の安全なるを確めしめぬ。

如何となれば、乘客等は爾く身を殺して仁を爲さむとせし、此大聖人の德の宏大なる、天は其の報酬として渠に水難を與ふべき理由のあらざるを斷じ、恁る聖僧と與にある者は、此結緣に因りて、必ず安全なる航行をなし得べしと信じたればなり。良時を經て乘客は、活佛——今新たに然か思へる——の周圍に集りて、一條の法話を聞かむことを希へり。漸く健康を

回復したる法華僧は、喜んで之を諾し、打咳きつゝ語出しぬ。

「私は一體京都の者で、毎度此の金澤から越中の方へ出懸けるが、一度ある事は二度とやら、船で（一人坊主）になつて、乘合の衆に嫌はれるのは今度がこれで二度目でござる。今から二三年前のこと、其時は、船の出懸けから暴風雨模樣でな、風も吹く、雨も降る。敦賀の宿で逡巡して、逗留した者が七分あつて、乘つたのはまあ三分ぢやつた。私も其時分は果敢ない者で、然云ふ天氣に船に乘るのは、實は二の足の方であつたが。出家の身で生命を惜むかと、人の思はくも恥かしくて、怯氣々々もので乘込みましたぢや。さて段々船の進むほど、風は荒くなる、波は荒れる、船は搖れる。其又搖れ方と謂うたら一通でなかつたので、吐くやら、呻くやら、大苦みで正體ない者が却つて可羨しいくらゐ、と云ふのは、氣の確なものほど、生命が案じられるでな、船が恁うぐつと傾く度に、はツ〳〵と冷い汗が出る。さてはや、念佛、題目、大聲に鯨波の聲を揚げて唸つて居たが、やがて其も蚊の鳴くやうに弱つてしまふ。取亂さぬ者は一人もない。

恁云ふ私が矢張その、おい〳〵泣いた連中でな、面目もないこと。

昔彼の文覺と云ふ荒法師は、佐渡へ流される船路で、暴風雨に會つたが、船頭水夫共が目の色を變へて騷ぐにも頓着なく、大の字なりに寢そべつて、雷の如き高鼾ぢや。

すると船頭共が、「恁※惡僧が乘つて居るから龍神が祟るのに違ひない、疾く海の中へ投込んで、此方人等は助からう。」と寄つて集つて文覺を手籠にしようとする。其時荒坊主岸破と

起上り、舳に突立ツて、はつたと睨め付け、「いかに龍神不禮をすな、此船には文覺と云ふ法華の行者が乘つて居るぞ！」と大音に叱り付けたと謂ふ。

何と難有い信仰ではないか。強い信仰を持つて居る法師であつたから、到底龍神如きがこの俺を沈めることは出來ない、波浪不能沒だ、と信じて疑はぬぢやから、其處でそれ自若として居られる。

又死んでも極樂へ確に行かれる身ぢやと固く信じて居る者は、恁云ふ時には驚かぬ。

まあ那樣事は措いて、其時船の中で、些とも騷がぬ、いやも頓と平氣な人が二人あつた。美しい娘と可愛らしい男の兒ぢや。※弟と見えてな、似て居ました。

最初から二人對坐で、人交もせぬで何か睦まじさうに話をして居たが、皆がわい〳〵言つて立騷ぐのを見ようともせず、まるで別世界に居るといふ顏色での。但金石間近になつた時、甲板の方に何か知らん恐しい音がして、皆が、きやツ！と叫んだ時ばかり、少し顏色を變へたぢや。別に仔細もなかつたと見えて、其内靜まつたが、※弟は立ちさうにもせず、まことに常の通りに、澄して居たに因つて、餘り不思議に思うたから、其日難なく港に着いて、※弟が建場の茶屋に腕車を雇ひながら休んで居る處へ行つて、言葉を懸けて見ようとしたが、其子達の氣高さ！貴さ！　思はず此の天窓が下つたぢや。

そこで土間へ手を支へて、「何ういふ御修行が積んで、あのやうに生死の場合に平氣でお在なされた」と、恐入つて尋ねました。

すると答には、「否、私等は東京へ修行に參つて居るものでござるが、今度國許に父が急病と申す電報が懸つて、其で歸るのでござるが、急いで見舞はんければなりませんので、止むを得ず船にしました。しかし父樣には私達二人の外に、子と云ふものはござらぬ、二人にもしもの事がありますれば、家は絶えてしまひまする。父樣は善いお方で、其きり跡の斷えるやうな惡い事爲置かれた方ではありませんから、私どもは甚※危い恐い目に出會ひましても、安心でございます。それに私が危ければ、此の弟が助けてくれます、私もまた弟一人は殺しません。其で二人とも大丈夫と思ひますから。少しも恐くはござらぬ。」と恁う云ふや。私にはこれまで讀んだ御經より、餘程難有くて涙が出た。まことに善知識、そのお庇で大きに悟りました。

乘合の衆も何がなしに、自分で自分を信仰なさい。船が大丈夫と信じたら乘つて出る、出た上では甚※だと安心がならぬ、人を恃むより神佛を信ずるより、自分を信仰なさるが一番ぢやの。」

船の港に着きけるまで懇に說聞かして、此殺身爲仁の高僧は、飄然として其名も告げず立去りにけり。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集　巻二」岩波書店
　　1942（昭和17）年9月30日第1刷発行
　　1973（昭和48）年12月3日第2刷発行
入力：土屋隆
校正：門田裕志
2005年10月28日作成
2011年3月23日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

旅僧

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/